

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第59号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)4月16日 日曜日

2017年(平成29年)4月16日 日曜日



宮城・女川・・・満六年を過ぎて本格化した復旧工事

無謀な三陸沿岸部縦 断取材決行

あの六年前の大津波による被災地で、これまでまだ取材していない地域があった。それが宮城県の女川と気仙沼地区だった。

もう満六年を過ぎた三陸沿岸部のいま(宮城県) 復旧工事本格化までに 実に六年を要したのか?

女川は以前行こうと思っ
たが、急きよ、牡鹿半島取
材に切り換えた経緯がある。
気仙沼は、JR開通までに
大分時間がかかることが予
想され、また陸路でも道路
事情があまり良くないとい
うことを聞いていた。
また、電車で行ける岩手県
側から、気仙沼と岩手県
大船渡を一括で取材しよう
という目論見もあったので、
先延ばしにしていた。
それでも昨年には、行こう
としたが、東日本全体に大
雪が降り、東北新幹線がス
トップしたので、急きよ中
止にしたということもあっ
た。



遠くの山では高台住宅地造成中

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営
コンサルタント、趣味は、縄
文文化研究、この2月に株
式上場プロフェッショナルを
養成し、IPOの経営者教育
も行うスクール『IPO マス
タースクール』を開校、校長
就任



カーナビが用を成さ ない女川港近辺

前日泊の仙台から早朝石
巻へ。石巻駅でレンタカー

トで、往復200キロ以上
時間は、検索機能で調べた
限りでは、走りっぱなしで
9時間前後、工事や渋滞で
もあれば、帰りの予約切符
がムダになるという無謀さ
だった。でも行かなければ
ならなかった。

女川はようやく復旧 工事本格化?

ようやく、ひっきりなし
にダンブが行き交う復旧工
事真只中の女川港を抜け、
空き地に車を止めて全体を
眺めてみた。
あの震災から満六年を

を借り、一路女川へ。
女川への路上、石巻港近
くの工事が、遠くからでは
あったが、以前取材で訪れ
た時よりも大分進展してい
るのが見えた。帰りに時間
の余裕があれば見たいと思
ったが、時間がなく断念。
女川港が近づくにつれ、以
前の道路が跡形もなく消え、
新たな工事用道路が開通し
ている。カーナビがまった
く機能しない。同じところ



JR線も開通した立派な新駅舎(女川)



復興さきがけの象徴の新商店街(女川)

の時間感覚が狂ってしまった。
まるで震災直後に戻
ったようにも思え、いまは
一体いつだったろうか、と
自問自答するほどだった。
マスメディアはこうした
「現実」を報道して欲しい。
復興ならぬ復旧さえ、満六
年を過ぎても終了していな
い現実を報道して欲しい。

新JR女川駅と新商店 街と隣の造成地工事

JRが開通したというニュ
ースを大分前に聞いていた
ので探して訪ねてみた。
駅舎は新しくなっていた。
建物内には温泉施設もあり、
小規模の物産展も開催され
ていた。
すぐ近くの新商店街も真
新しく、買い物客がまばら
に買い物と散策をしていた。
この一画だけが、いかに
も復旧したと主張してい
るのように見える。
しかし、隣の区画はいま
まさに造成中であり、盛土
工事と、山を切り崩す整備
工事が同時に行われていた。

いまは穏やかな北上町 十三浜から志津川湾

女川から海岸線に最も近
いルートのブルーラインを
通り、雄勝岬で有名な雄勝
を抜け、釜谷トンネルを抜
けて、北上町十三浜大室で
停車。
ここは以前、大震災後に
大室南部神楽の復活イベン
トがあり、おじゃましたと
ころだ。いまはすっかり穏
やかな海である。
次に停車したのは志津川
湾。外海が春の光を受けて



数年前の南部神楽復活の地・・・石巻市十三浜
大室の穏やかな漁港

穏やかな姿を見せている。大津波の映像とのギャップに思いをめぐらす。

大賑わいの南三陸町の新さんさん商店街

さらに北上して、南三陸町中央に向かった。話題と



大勢の客で混雑する商店街駐車場(南三陸町)

なっている「新さんさん商店街」を訪問するため。土曜日でもあり、また商店街がオープンしたばかりということもあり、すぐ駐車場に入れず、待機を余儀なくされたほどの人手だ。しかし、これも女川と同じ



大津波が着たとは思えない志津川湾(南三陸町)

様に、にぎわう商店街のすぐ隣は、造成工事中である。マスメディア報道の怠慢さを再確認した。

気仙沼漁港は工事状況

石巻に戻る時間に間に合うかどうか不安になったの



3月にオープンしたばかりの新さんさん商店街(南三陸町)

で、10分ほどで次の訪問地の気仙沼に向かう。近づくに連れ、工事用ダンプが増えた。渋滞に巻き込まれ、ただでさえ少ない取材時間確保に気が気でない。迂回を試みたが、同じ場所に戻ってしまった。

港では、何の建物も分かんなかったが、大規模な工事中であった。港に停泊中の中型漁船も多かった。魚市場が石巻より早く復旧したおかげだろうか。JR気仙沼駅にも行ってみた。途中、まだ大震災直後の様子を留めている土地を見た。建物の基礎がむき出しになっており、そこだけが、明確に大津波が襲来したことを伝えてくる。駅ではBRT(バス高速輸送システム)を初めて見た。そして通常の電車も停車し、BRTも同時並行で走る駅も初めて見た。帰る時間が迫ってきたので、帰路を急いだ。渋滞にはまった。気が気ではない。思い切って、通常のルートとは別の道を選択した。



商店街のすぐ隣は土地造成工事中(南三陸町)



津波被害が生々しい場所(気仙沼)

結果、岩手県一ノ関市に入るなどして不安になりつつも、信号で停車することもなく、無事石巻駅に予定時間内で着くことが出来た。石巻市、女川町、北上町、南三陸町、志津川湾、気仙沼市、往復250キロの、

取材を終え、自宅に戻った直後から、長時間のレンタカー移動によるギックリ腰になり、またしつこい風邪をひいた。風邪は三週間にも亘り、治っては戻り、治っては戻りを繰り返した。よくよく考えてみれば、取材したのは、津波による被害者がたくさん出た地域ばかりだった。そういえば、取材中も、走る道路の上に「津波到達地点」という看板をたくさん見た。それは、あそこで津波にのみ込まれた人がたくさんいたということだ。取材中は単なる看板であったが、風邪で寝込んでいたときにそのことが急に意識さ

ほとんどにあわたらしい取材であったことを終わってから反省した。

復興遅れだけではなく、犠牲者を悼む

はよほどの覚悟がある。当新聞の前号で取り上げた盛岡の僧侶の、被災地で、ただただこうべを垂れる姿を切り取った写真がすごく思い出された。



気仙沼駅のBRT遠景



停泊中の漁船(気仙沼)



少人数だが、長時間語り合った

ほんとに久しぶりの「とにかく東北を語る会」であった。すべて筆者の怠慢によるものだが、前回から二年近く空いてしまった。今回も「星港夜」を会場に、いつものコアメンバーだけの会となり、このブランクの期間に貯め込んだそれぞれのネタをすべて披露するには四時間や五時間では足りないとはばかりに、みな機関銃のようにしゃべりまくった。六時から始めたのだが、気づくと十一時近くになっていたほどだ。

ずいぶん久しぶりの「とにかく東北を語る会」そして「かき蔵」開店祝いと初の「ホヤの干物」

最後に、大震災から六年が経過するが、当新聞への寄稿も頑張っていたことと確認しあって別れた。ちょうどこの日は、当新聞の創刊号でも記事掲載した斎藤浩昭氏が、「かき蔵」というオイスターバーを開店する日でもあった。大分遅い時間になってし

は足りないとばかりに、みな機関銃のようにしゃべりまくった。六時から始めたのだが、気づくと十一時近くになっていたほどだ。話題はいつもの如く、あちらこちらと飛んだ。東北復興の話、東北六魂祭、東北の上場企業数が全国と比べて非常に少ないことや、インバウンド観光で東北が一人負けになるのはなぜかなど、すべてを思い出せないほどであった。



ホヤの干物で一人打ち上げ

まったが、とにかくおじゃましてと十一時半過ぎにお店を訪問したが、帰られた後だった。スタッフに名刺を預けて帰ることにした。翌日の三陸沿岸部の取材が終わり、新幹線で帰京する際には、あのタモリも大



かき蔵開店

好物というホヤの干物を購入して、一人晩酌兼取材の打ち上げとした。ホヤの干物は何となくウニの香りがして、ビールのつまみにぴったりであった。ぎつしり詰まった取材旅行となった。

第32回 水産業再興のための料理レシピ紹介
 今回はカスベ(エイ)のダブルレシピ!
《カスベ(エイ)の煮付けとヌタ(酢みそ和え)》



【煮付け完成品】



【ヌタ完成品】



【カスベ切り身】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

カスベとは?エイの事です。北海道では、旬のこの時期によく出回っています。軟骨もコリコリ感があり、身はプルンと柔らかい。カレイのように淡白な魚です。美肌にもバッチリなコラーゲンがいっぱいなカスベは、甘みもあり美味しいです。

一簡単レシピ

【材料】《煮付け》カスベ 切り身(写真参照)、出し汁2C、醤油大2、みりん大1、酒大2、砂糖大1、生椎茸4個、生姜 適量 《ヌタ》上記素材に加え、ネギ、味噌、酢、みりん、砂糖

【作り方(煮付け)】カレイの煮付けの要領に準じます

【作り方(ヌタ)】①調理する前にカスベは一度、お湯をかけるとよいです。②ぬたは、刻んで(1センチ)塩もみをし1時間したら、ひたひたの酢に一晩つけます。翌日に酢みそで(味噌、酢、味醂、砂糖)和え、湯通ししたネギをいれます。



写真でお伝えする 東北の風景 (また、鹿・・・)

写真撮影：尾崎匠



2回目の「仙台防災未来フォーラム」とは

「仙台防災未来フォーラム」とは

3月12日、「仙台防災未来フォーラム2017」が開催された。昨年3月の第46号で取り上げたが、一昨年仙台で開催された国連防災世界会議をきっかけに昨年初開催された、地域における防災の取り組みを共有し、これからの防災について考えるためのフォーラムである。

震災の発生から6年が経過した。この間の震災の経験や教訓を、地域を超えて、世代を超えて、どのように伝えていくかについては、多様な主体、媒体が手探りで様々な取り組みが続いている。そのような中でこの「仙台防災未来フォーラム」は、仙台市が主催し、震災経験の伝承や、地域防災の次代の担い手づくり、人々の多様性と防災といったさまざまなテーマについて、「伝える」ことの大切

さや今後の課題について理解を深め、経験や教訓を世界へ、そして将来へどのように受け継いでいけばよいのかを考えるという趣旨で開催されている。一昨年の3月に開催された「第3回国連防災世界会議」には、世界185か国から6,500人以上が参加し、成果文書として「仙台防災枠組2015-2030」が採択された。「仙台」の名を冠するこの防災枠組は、防災に関わる新たな国際的な取り組みの指針で、期待される成果と目標、指導原則、優先行動、関係者の役割や国際協力等が規定されている。「仙台防災未来フォーラム」は、この国連防災世界会議の仙台開催から1周年となったのを機に昨年3月に開催され、今年が2回目である。仙台市では現在、子供から高齢者まで、性別や国籍の違い、障害の有無などによらず、地域のすべ

執筆者紹介

大友浩平

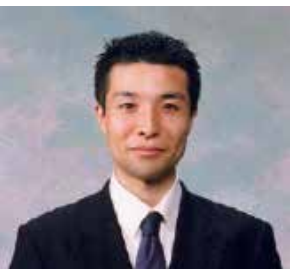
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.otomo



ての関係者が自助・共助を担うという地域づくりを進められている。フォーラムは、そうした取り組みを踏まえ、防災の担い手たちが自分たちの取り組みを共有・継承することで、新たなネットワークを生み出し、未来の防災に貢献することが目的とされた。

「インクルーシブ防災」とは

今回のフォーラムのテーマは「経験や教訓を共有・継承する」で、6つのテーマセッション、ミニプレゼンテーション、連携シンポジウム、各種関連イベント等が開催された。6つのテーマセッションの一つは「インクルーシブ防災を指した地域づくり」である。「インクルーシブ防災」とは、障害者や高齢者などを含む、あらゆる人命を支える防災を指していることという考えである。東日本大震災を機に防災・減災への関心は高まり、日頃からの備えと対策が必須だとされているが、災害発生時の対応はまさに平時の取り組みの延長であるといわれる。そしてまた、災害が発生した際の安心・安全の確保には、普段からの地域住民の相互理解とネットワークの構築が大切である。

このセッションでは、そうしたことを踏まえて「仙台防災枠組」に記載されたステークホルダーの役割を問いつつ、インクルーシブ

防災をめざした地域づくりについて議論が行われた。その中で、立木茂雄氏(同志社大学社会学部)は、「災害時の当事者力イコール防災力イコール」で、防災リテラシーは「理解×備え×つぎの行動」と指摘していた。そして、平時のケアプランから個別に災害時ケアプランを作成する『別府モデル』を構築しようとしている取り組みについて紹介した。山崎栄一氏(関西大学社会学部)は、法学の専門家の立場から、「インクルーシブ」とは、排除・除外のない状態」で、そこには「意図的な差別的取り扱い」以外に、「無配慮・無関心によるもの」もあるとした上で、各種の支援制度には、「支援」「配慮」に「参画」を加えた三要素の連動が必要と指摘した。阿部一彦氏(東北福祉大学総合福祉学部)は、「障害による暮らしにくさは個人の課題でなく、多くは社会環境によって作り出される」と訴えた。

コーディネーターの三浦剛氏(東北福祉大学総合福祉学部)は、「地域に住む住民を理解し、日頃からの関わりを通してどのような支援が必要か把握していくことが『我がこと・まるごと地域づくり』の推進につながる」とまとめたが、フロアから発言した熊谷信幹氏(柏木西部自治会防災担当)は、『インクルーシブ』と言うが、そもそも障

害者基準で防災システムを作るべき」と主張した。「誰でも年老いたら障害者」であり、「障害者は多数派」なのだから、『障害者も交ぜてくれ』という話は筋違いだ」という論旨で、フロアから拍手が起こっていた。他には、「地域のきずな」が生きる防災まちづくり、仙台市の事例から学ぶ」というテーマセッションもあった。「持続可能な防災まちづくり」を進めていくために、日頃からの顔の見える「人と人とのネットワークや地域コミュニティづくりがまず大切」ということから、「日常的にまちづくり活動が活発で、それが防災の優れた取り組みにもつながっている」という事例を共有し、コミュニティにおける地域防災の今後の活動や課題解決のヒントを考えるという趣旨のセッションであった。登壇した今野均氏(片平地区連合町内会)の「防災活動はまちづくりの一つ」という言葉に如実にそのことが表れていた。

また、菅井茂氏(南材地区町内会連合会)は、「自分達のまちは自分達で守る。自分の命は自分で守る。そのため地域で顔の分かる関係の構築が大切」と訴えた。町内会として他の被災地に「押しかけ支援」としてできる範囲の支援・協力をやってきたを続けてきた福住町町内会の菅原康雄氏は、その秘訣として「でき

「多様な主体」による防災・減災

フォーラムのまとめとして、「クロージング」が行われた。ここでは、それぞれのテーマセッションでの議論結果が報告されると共に、それを基に震災の経験や教訓などを伝えることについて、その大切さや課題について考え、多様な主体(マルチステークホルダー)による防災・減災の取り組みの今後の方向性などについて参加者で共有した。

「ともに考える防災・減災の未来」私たちの仙台防災枠組講座、『結プロジェクト』合同報告会』の保田真理氏(東北大学災害科学国際研究所)は、報告会の模様を紹介しつつ、「社会の構成員全てが共に考え

ることがレジリエントな社会をつくる」と述べた。「もしものそなえ SENDAI」と世界のつながり、伝えよう、共有しよう、継承しよう」の秋山慎太郎氏(JICA地球環境部)は、JICAの取り組みを伝えつつ、「伝えていく中で、伝えられる側、伝える側双方の学びが重要。それがもしもの備えにつながる」と指摘した。

震災から6年・教訓伝承と防災啓発の未来、連携と発信の拠点づくりに向けて」と「次世代が語る/次世代と語る」311震災伝承と防災」の武田真一氏(河北新報社防災・教育室)は、「震災だけでなく、地域の過去や未来、希望も併せて伝えることでさらに(震災のことを)伝えられる」と強調した。ミニプレゼン・展示ブースの小美野剛氏(JC-CDDR事務局)は、「教訓を未来の活動につなげる」ことの重要性に言及しつつ、「全ての活動は共感に基づく」こと、そしてこれからは「単なる支援から、新たな価値の創造への移行が必要」であることも併せて主張した。

コーディネーターの松岡由季氏(国連国際防災戦略事務局)は、一連の発表を踏まえて、『レジリエント』と『インクルーシブ』が仙台防災枠組のキーワード」であり、「社会全体が『レジリエント』であるために『インクルーシブ』である必要がある」とまとめた。また、「伝承は人の命を救う力がある」とも述べた。もう一人の立花貴氏(公益社団法人MORIUMIUS)は、「防災は日常の延長線上」にあるとして、「地域の取り組みが有事にも機能」するとした。また、「単なる事実でなく、そこに込められた思いを伝える」ことが震災の伝承においては重要であるとも指摘した。

六県連携でより幅広い発信を

仙台市では、11月に「世界防災フォーラム/IDRC2017 in SENDAI」の開催が決定した。スイスのダボス2年に1回開催される防災の国際会議「国際災害・リスク会議」(IDRC)で発表されたもので、東北大学、仙台市が中心となって内外の防災関係者が集い、震災の教訓・知見の発信や議論を行

いながら連携を強化する場として開催するもので、今年だけでなく、以降も隔年での開催が予定されているという。

仙台防災未来フォーラムに加え、世界防災フォーラムも開催されることとなり、東日本大震災への対応、そこからの復興に関する情報発信を継続的に行っていく場が着々とつくられていることは実に喜ばしいことである。願わくは、これを仙台市だけの取り組みとするのではなく、宮城県内の他の市町村や東北の他の五県とも連携して、より幅広い情報を発信して欲しい。

連載
むかしばなし



第四十七話
「奥州大夢幻」

賢治と、喜善の身体は、

「光原社」内部に根を張る巨樹の裂け目の中で、縮み続けていた。彼らから見れば、ほとんど巨大な女・トヨハはそんな二人をじっと見下ろしている。

「な、何か言い残した事はなかったかい：宮澤くん」「わからない事だらけです。この娘さんはもう何も語ってくれずまい。」

「その、穀物の穂・大きな収穫となればいいがね」喜善がガラスケースの中の穂先を見て、言う。「どうでしょうか・これも明らかに、稲ではなく、



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

稗と大麦を合わせたような感じですか。いずれにしても、人類は滅びるのです。私のイーハトーブも・何を試みようと、空しい気がします。」

「宮澤くん。トヨさんはこの仙臺から、また始めてくれる。二グヴンや、他のサイドの皆とね。」

見上げると、女は笑いかけってきたように見えた。「喜善さん、私もは宇宙の殻を破ったのかも知れませんが・そして今また、殻の中に還ろうとしている」

「へえ・宇宙とは、途轍もなく大きなものだと思っ

ていたが、その、還つていく所とは。」

*

八百年後に仙臺という未来都市の中心交差点「芭蕉の辻」となるといふ、草原に立つ祝魚たちは、目まぐるしく変わっていく目前の幻影が、ようやく落ち着いてきた事に気づいた。

「柿の毒が切れてきたか」「毒とは何だえ！」祝魚の呟きに、柿の樹の

精霊・丹十郎が囁み付く。

「喰った者に幻覚が見える。毒茸みてえなもんだべ」「いや・ただの幻覚かどうか。確かめてみればいいべし。」

まさか、と思ひ見渡す。彼らの立つのは巨大な十字路の真ん中・徳川時代の、四隅に巨大な瓦屋根を配した古の風景から、景色の変化は続いて、やがて瓦屋根の一つが瀟洒な尖塔を持つ洋館に変わった。これが幻覚でなくて、何だというのか・。

遊女の本子が一つの瓦屋根の下に入って、柱に手を伸ばす。手応えがなく、すかすかと柱を通り抜けた。「やっばり、幻・いや、待って！」

何か感触があったらしく、手を引っ込めて、また恐る恐る近づける・さらに、と木材を撫でる音がした。

「触ると実体化するよ！」その場にいた一同、驚いて一斉に目前の建物へ駆け寄る。手をかざした柱や壁がみるみる現物化し、視覚的にも確かに濃い色を帯びた。

「無闇に触れるな!」体、何が起こっている?」機関士助手が動転する。

「銀行の洋館が実体化したか・あの塔に登って街を俯瞰するのもよかんべえ」祝魚が銀行建築の中へ入り、本子が追う。二人は二階、三階と駆け上がっていき、シンボリックな尖塔まで登っていった。

「見て!鎌倉の軍隊だ、すごい数で押し寄せてくる」確かに、南の山々の麓が蠢く黒い塊で埋め尽くされていった。それにも増して、幻の街並が、芭蕉の辻を基点に徐々に現れ、広がりを

見せているのがわかった。「結果が完成するのか・そろそろ、汽車に戻った方がいいのかも知れん。」

綾糟の起こした大風に煽られ、南岸へ押し戻された軍隊が、体勢を立て直し再び対岸を目指しつづつあった。又太郎は目前の三人、夫妻、そして息子らしき関係の者らに向き合った。

「大天狗・殿か。某、もとい拙僧、下総坊藤胤と申す。前身は秀郷流足利又太郎忠綱でございます。」

大天狗の顔はどう見ても二十代の若者であるが、その声は威厳に満ちている。

「鎌倉三十万騎、この奥羽大天狗が一手に引き受けようぞ。我に一切の呪詛も通じぬわ、生臭めが・」又太郎が押し留めた。

「これ以上の争いは無意味にごさる。この藤胤、命に換えてこの山河村落押し並べてお守りする所存。」うぬが、この地を拝領し

て統治する、というのか」「御意。既に頭領がお許しを戴いております。」大天狗は懐疑的である。「軍が回復します。お急ぎください!」

その時、バラバラになつて地面を埋めていた骨片が俄かに転がり出して一箇所に集まり、むくむくと起き上がった。

「待て、護法!」

「無駄だ。この怪物には名取太郎が憑いている・我々は因縁の宿敵でな。」

「名取太郎・なるほど、道理で旅の途中から妙に賢くなったと思つた・」又太郎、はつと何か思い当たる事があつた様子。両手の指を不思議な型に組み、何やら気合を込めていく。

「護法は確かに心は空なる人造の士でござるが・憑かれて傀儡となるほど単純なカラクリではござらん。」

「と、いうと?」

「憑いた魂の、赴くべき所へ導く。それが師・西行が込めし護法善神の力なり」又太郎は指の組み方を変えながら、呪文を唱えた。すると、骨片の塊の動きがざわつと音を立てて変わり、大天狗らの脇をたちまち通り過ぎていくのだった。

「や、奴は、どこへ?」

「何はともあれ、拙僧にお任せあれ・御本抱へ!」

忠衡が、『異次元の父母』である二人に頭を下げる。「それがし、まだ仕事が残っております・後ほど」

背後の川岸には、既に勢いを取り戻した兵たちが馬や小舟で押し寄せ、昂ぶりに叫んでいる。「骨の化け物に続けえ!進軍じゃ、進軍じゃあ!」

秦衡は夜明け近い東の空に向けて馬で駆け、再び鞭の丘に到着した。石川善助より受け取った「六つ目の石」を手に、丘の一角の梅の木の根元にしががむと

「じむぐり、じむぐり」と呟き根を叩く。すると、樹の根の間から褐色の蛇が現れた。

「この石、代々、頼むぞ」そう秦衡が言うと、蛇が口をかあつと開ける。そこへ石を嵌め込もうとしたその背中を、突然誰かが突き飛ばした。地面に転がった石を、さつと奪い取つたのは、何と、少女・若である。

「若どの!何をされる。」秦衡はしかし、すぐに覺つた。いま、少女の身体を支配しているのは、取り憑いた者・阿古耶姫だ。「我はトヨに会わねばならぬ。この娘の身体を失えば、我は再びトヨと同化する術を逸す。それは許されぬ」

「トヨ殿と、同化・!?!」ではその娘を、元の時代へ返さぬつもりか?」

「よく考えよ、藤原の御館・我なしではこの娘、病身ゆえ長くもないのだぞ。元の世界に還つたとて、どれだけの意味があるのか」

秦衡は返答を飲み込む。「それよりもトヨの力を得て、帝の国を征する人生・

・それに勝る面白い生き方があるのか!」

「思わぬ言葉に目を瞠る。何と、野心猛き女子か。なるほど・それは、それは、面白い人生だな。」しかし秦衡は続ける。「其方も藤原の姫であろう・わしの曾祖父・清衡はここ奥州の覇者となり藤原の国を建てた。同じ奥羽の藤原として、ここで民を支え続けてはくれまいか。」

「調子のいい事を・そちらは知っておるではないか。その清衡の国が、もはや終りに瀕している事を。」

南の平原に男たちの叫びと轟音が広がっていく。「国分寺から火が上がつた・僧らは逃げおせただろうか。」

頼朝が、すぐ近くまで来ている・。「さあ、逃げぬで良いのか?伊達。石は諦めよ・我はここで鎌倉殿をお迎えする・六つ目の石、そしてトヨを土産にな・いや、待てあれは」

阿古耶が何か南の異変に気づき、後ずさりした。秦衡は目を凝らし、息を飲む。それは、人間ではない。

「また会いたいものだ、仙臺の石川善助殿。」

そう言うと秦衡は、怪物の嵐のような骨片の流れの中へ飛び込んで、地面にうずくまっている少女の肩に手を掛け、叫ぶ。

「高館の三姉妹よ、聞こえるか!この娘を、次の窟まで送つておくれ・」

恐怖に駆られ、阿古耶は脱兎の如く逃げ出す。ところが、途端に一人の男と正面衝突して、地に転がった。片脚の悪い青年の、丸眼鏡が吹っ飛ぶ。

「いけないなあ!若ちゃん、このお転婆さん。この石は、もともと不肖・石川善助の仕事、まかせときなさい」

「か、返せ!」

石を取り戻した善助、眼鏡も拾つてよるよると立ち上がる。その裾を掴もうとした少女を、骨の集合体が襲つた。阿古耶が泣き叫ぶ。「な、何故です名取さま・その化け物に操られておいでなのですか?正気にお戻りになって・私は阿古耶、千歳山の阿古耶です・!」

善助が秦衡に言った。「遅くなりました・伊達さま。やはり、わしも見届けたく思ひましてな。」

「かたじけない・済まぬが石川殿、引き継いでくれるか。じむぐりの口に、入れてやるだけで良い。それがし若どのを救いに参る」

「御意、です。これで、お別れになりますか・伊達小次郎、秦衡さま」

「また会いたいものだ、仙臺の石川善助殿。」

そう言うと秦衡は、怪物の嵐のような骨片の流れの中へ飛び込んで、地面にうずくまっている少女の肩に手を掛け、叫ぶ。

「高館の三姉妹よ、聞こえるか!この娘を、次の窟まで送つておくれ・」

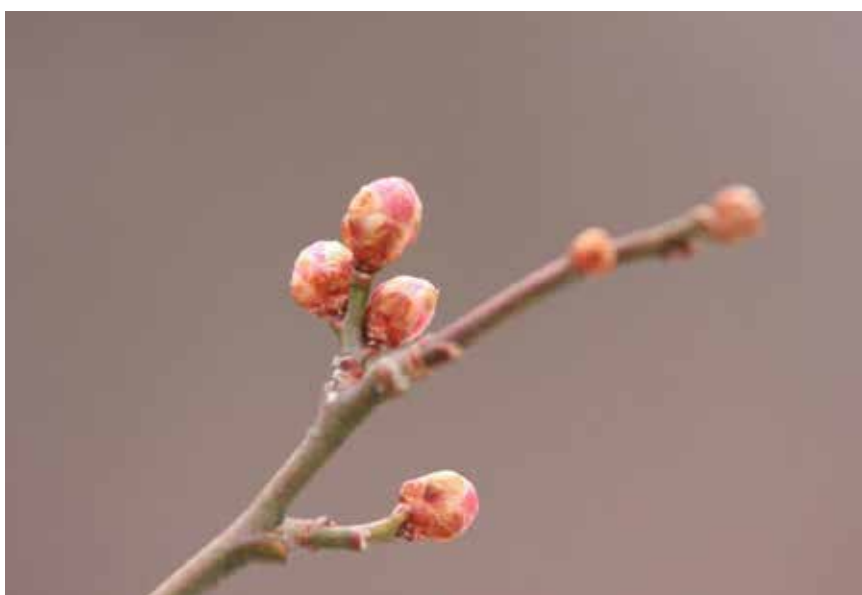
善助にはもう、骨片の怪物の中の、秦衡の影を確認する事ができなかった。自分によれる事はただ一つ。「仙臺よ・俺はお前という町を愛し、裏切られたのだ。けれど、それでも俺は愛す。離れても、愛す。」

善助の手の中の、複雑な蒼に輝く石が、紅き蛇の口へ吸い込まれていった。

「なつ・何だ!これは。」

シリーズ 遠野の自然 「遠野の清明」 遠野 1000 景より

筆者は、先月下旬からのしつこい風邪のせいで、家に閉じこもり状態で花見も出来なかった。その分を遠野の清明に咲く花の写真で埋め合わせようと思う。



春待つ梅

この季節、遠野ではまだ冬の名残と春が交錯するようだ。雪も残っているようだし、その一方で、春の花も咲き始めた。梅はまだつぼみで、待ち遠しさが伝わってくる。ミツバチの訪問を受けて



クロッカス



なごり雪

いるクロッカスは大好きな花だ。ミスミソウ(ユキワリソウ)の一輪は可憐だ。フクジュソウの鮮やかな黄色もまぶしい。一方でなごり雪に朝の霜。まだ気を緩めてはならない。

三月に催された黒森神楽からは、まず「山の神」の面の赤に惹きつけられた。「榊葉」では、舞手が高く宙に跳んでいる。すごい躍動力で、春のエネルギーを感じさせてくれる。



霜の朝



黒森神楽 榊葉



ミスミソウ(ユキワリソウ) 一輪



雪中フクジュソウ



黒森神楽 山の神



福島県地図

高野病院が提起した問題 福島県双葉郡の医療事情 高野病院長死去で明るみに!

福島県双葉郡とは

この記事は福島県双葉郡の医療に深く関係するものである。

とはいえ、福島県との関係者ならいざ知らず、福島第一原発問題が発生して以降のいまでも、福島県双葉郡という場所を正確に言える人は少ないだろう。

双葉郡は以下の六町二村で構成されている。

- 広野町(ひろのまち)
- 楢葉町(ならはまち)
- 富岡町(とみおかまち)
- 川内村(かわうちむら)

- 大熊町(おおくままち)
- 双葉町(ふたばまち)
- 浪江町(なみえまち)
- 葛尾村(かつらおむら)

個別の六町二村の名前を聞けば、なるほどと思うが、双葉郡というくりでは話にならないことはめったになかった。

人口7,265人、面積865.71km²、人口密度8.39人/km²(2016年10月1日、推計人口)

その双葉郡を左の地図で確認し、さらに右下の図で、福島第一原発との位置関係も確認してみよう。

お分かりのように、福島第一原発の周囲を取り囲んでいる六町二村が双葉郡ともいえる。

広野町の高野病院長が昨年未死亡した

昨年十二月三十日、広野町にある民間病院の高野病院の院長である高野英男氏が自宅での火事で亡くなった。81歳だった。

高野院長の死により高野病院は存続の危機に立たされてしまった。

高野病院は、福島第一原発のすぐ近くにありながら避難することなく、地域を支え続けた病院として知られている。

そのため、病院の存続問題は、病院単独の問題ではなかったのだ。

ただでさえ不足している地方の医師、病院であるが、福島第一原発問題が発生してからは、医療関係者の避難により、福島県内ではさらにその不足に拍車がかかった。

福島第一原発に近くなればなるほど急激な不足はさらにひどいものであったろう。

結果として、たった一ヶ所残され、双葉郡の最後の砦といわれていた高野病院であった。

震災後、高野病院は広野町周辺地域で唯一入院診療が可能な医療機関として地域の復興を支えてきた経緯がある。

この病院まで消滅したらこの地域の医療は完全に崩壊するところまで行くのである。

時間ない、スタッフも少ない、院長の体力もない中での診療

そうした中で、81歳という高齢にも関わらず、唯一の常勤医師として診療を行ってきたのが高野英男氏だった。

さらに、100人を超える入院患者への診療だけでも大変なところに、周辺の病院撤退、医師避難で、外来患者まで押し寄せてくることになった。

そのため、高齢にもかかわらず、広範な地域の医療を一手に引き受けざるを得なくなり、若手の医師でも体力的に無理だという状況のなかでの診療行為であったようだ。

高野氏を知る関係者は以下のように述懐する。

「高野院長は私からみると『超人』です。80歳を越えてもおお直をこなし、本業は精神科なのに内科の診療もやっていた。非常勤の医師を統率して、地域の医療を支えてきたんです」

火災にあった自宅も病院のすぐ近くで、事実上、365日24時間、地域の医療のために働いているようなものだったという。

その後の高野病院

幸いにも存続が危ぶまれた高野病院だったが、全国からボランティア医師が集

壊すところまで行くのである。

時間ない、スタッフも少ない、院長の体力もない中での診療

そうした中で、81歳という高齢にも関わらず、唯一の常勤医師として診療を行ってきたのが高野英男氏だった。

避難指示区域の概念図



福島県浜通り 避難指示区域の概念図

「高野院長は私からみると『超人』です。80歳を越えてもおお直をこなし、本業は精神科なのに内科の診療もやっていた。非常勤の医師を統率して、地域の医療を支えてきたんです」

幸いにも存続が危ぶまれた高野病院だったが、全国からボランティア医師が集

壊すところまで行くのである。

時間ない、スタッフも少ない、院長の体力もない中での診療